

歌と人 梅原ひろみ

朝日新聞の短歌時評で松村正直が、佐藤通雅の文章や小池光の歌を引きながら、ベテラン歌人たちが最近「言葉の扱い方や作品自体を論じ評価すべき」という立場から、歌人像を重視する方向へと変化しつつあることに対して「戸惑いを覚える」と書いている（十月二十日付『歌は人』でいいのか）。

具体的には次のような内容だ。佐藤通雅は「うた新聞」十月月号「生年について」で「作品は作品として自立しているのであって、作者の人生とは関係ない」という考えと「作品と作者は不即不離の関係にある」という考えがあつて、自分は前者に賛同してきたが「歌人像が浮かび上がってこないのは、何かが不足していると考えられるようになった」と言う。また小池光の最新歌集『梨の花』には「人間としてだめだからだめなんだ 歌集を閉ぢてわがひとりごと」「おもしろき事を語らぬひとの歌おもしろからず歌は人にて」という歌があるが、小池はその約二十年前に『将棋に人生を持ち込むと甘くなる』羽生善治言へり我ら頷く（『静物』）とも詠んでいた。松村は二人の変化が「短歌の本質に迫る話であるならば、もっと丁寧な説明を聞かせて欲しい」と問いかける。

松村は自身のツイッターに「最近目指しているのは『言葉の出どころが見えにくい』歌。身体や直感で掴み取った言葉やリズム

をできるだけ歌に取り入れていきたい」（七月二十二日）とツイートをしており、自らのテーマとも重なる部分があるだけに、この問題により敏感なのだろう。

松村の最新歌集『紫のひと』の、タイトルとなった集中の連作「紫のひと」は、美術館で観た絵のなかの人物との出会いを描いた不思議な味わいを持つ一連である。

- ・ 絵の奥へ奥へとのびる道があり窓の小さな建物が見ゆ
- ・ 展示室に時計はあらず絵のなかの壁の時計が午後四時を指す
- ・ まっ白な壁にかかりて手を触れることのかなわぬ紫のひと
- ・ ふかぶかと潜りたるのち水面へと浮かびしごととき表情をせり
- ・ 紫のひとは部屋から出て行きぬ絵のなかに私ひとり残して

自ら目指すものを実践するように、ファンタジックな雰囲気と手触りのある具体が一連に入り混じるなか、絵の中の人物との相聞を思わせる往還が描かれる。日常と非日常の往還とも言える。思うに、作品と作者は別という考えと、作品と作者は切り離せないという考えは、二者択一のものなのだろうか。

斎藤茂吉であれ塚本邦雄であれ、彼らの歌が今も我々の心を打つのは、作歌当時においての表現の新しさもさることながら、言葉に籠められた魂に、個人を超えた普遍性があるからではないか。その普遍性は、心に動く言葉を拾い上げていく作者のものの方、感じ方、ひいては包括的な作者のあり方が読み手に通じた時に生まれるもので、その意味で小池の「歌は人なり」は真実だと思つう。言葉を拾い上げる場所は作者の身近な日常風景かもしれないし、迷い込んでしまった想念かもしれない。論に添って歌は詠むべきという立場もあるかと思うが、詩は心の声だ。論は作歌を規定するものでなく、よき動機付けであってほしい。